

拝啓「非常に不愉快にさせてくれた人たち」様

「ほんと、バカバカしい話です。」

ほんと、むなくそ悪くなってしまうです。

ほんと、不愉快です。」

忘れられないのが、タクシ―の運転手です。どこで乗ったか、そういうものはいっさい忘れてしまいました。そういうものを忘れてしまうぐらい、不愉快にさせられたということでしょうか。

今では条例で本当にタバコを吸えなくなりましたが、あの時は違います。

なんで、金を払う側のお客さんである私が、あなたに「お客さん、タバコ吸うのやめてくれる？俺、タバコ吸わないんだよ」

と言われなければならないのでしょうか。そのぶっきらぼうな言い方にも頭にきたのですが、それよりも、あくまでお客さんの立場である私が、なぜ運転手であるあなたにそんなことを言われなければいけないのでしょうか。

言われた場所が、タクシ―ではなくあなたの自宅なら、

まだ話がわかります。あなたの個人的な自家用の車だったら話はわかります。タクシーですよ、タクシー。そして、あなたは運転手ですよ。私はお客さん。そんな構図にある関係で、なぜあなたにそんなことを言われなきやいけないんでしょうか。お客を乗せて、金をもらって商売している限り、それは歴然とした接客商売ですよ。そのどこに、接客精神があるのでしよう。

お客さんのタバコを吸うのがイヤだったら、タクシーの運転手なんかやめてしまいなさい。あなたが私に要求したセリフは、ただあなたの個人的な考え方でしよう。そんな個人的な考え方をお客さんに押し付けて、どうするのですか。なんで車の後ろに灰皿がついているのですか。タバコを吸う人のためにつけているのでしよう。そんなにタバコが嫌いなら、車のフロントガラスのところにはっきりと分かりやすく“禁煙車”と書いておきなさい。

そういう“運転手とお客さん”という関係のビジネスが成立する前に、そういう意思表示があれば、そしてそれをを見て私も納得してそのタクシーに乗り込んだので

あれば、あなたの要求を素直に受け入れましょう。そういうものもなく、ただあなたの個人的な見解をいきなり要求されても、それは本末転倒です。私から言わせればサギにあったようなものです。

はっきり言って、自覚がない。タクシ－の運転手も歴然とした立派な職業です。職業である限り、プロでなくてはなりません。はっきり言って、あなたの自分の仕事に対する考え方は、プロとは言えません。アマチュアです、ガキの使いのようなものです。

私はそのとき、なにを言ってるんだとばかり、バンバンタバコを吸ってやりましたが、あなたのタクシ－に乗って、不愉快にさせられたお客さんは他にもきつといっぱいいることでしょう。今からでも遅くはありません。そんなにタバコが嫌いなら、今すぐタクシ－の運転手をやめなさい。どうして金を払う側のお客さんが、運転手の個人的な好き嫌いに気を遣わなきやいけないのです。ようか。ほんと、バカバカしい話です。

矛先を少し変えさせてもらいます。昔住んでいた私の

近所の薬局のおばさん、あんたもいいかげんにしなさい。

私と血縁関係があったり、私の母親でもないのに、どうして薬を買いに行っただけの私に、

「あんた、ちゃんと子どもの面倒見てる？たまには、おむつ変えてる？ミルク、ちゃんと作れるの？少しは奥さん助けてやらないとダメよ。子ども育てるのは大変なんだから」

いいかげんにしなさい。なんであなたに、そんなことを言われなきやならないのですか。しかも、そのセリフを吐いていたときのあなたの顔は、“あんたみたいな人”とはつきり書いてあるような顔をして言っているのです。もう、これは偏見です。

その薬局のおばさんは、私という人間を知りもしないで、偏見のもとにしゃべっているのです。ほんと、むなくそ悪くなってしまうました。言っておきますが、薬局のおばさん、あんたに言われなくても、私は自分の子どもの父親です。あんたに言われたことは、私からすれば

当たり前前だと思っっています。すべてとは言えませんがちやんとそれなりにやってるつもりです。偏見で人を見てしゃべるのはやめなさい。私より長く生きているくせに、つきあいらしいいつきあいもしたことないくせに。

百歩譲ったとして、たとえ私があなたの言う通りの父親ぶりだったとしても、アカの他人がアカの他人に言える範囲というものは、限られたものがあります。あなたは私の母親ではないのです。私より長く生きているくせに、そのへんの気遣いもないのですか。そのへんのこと、分かってないのですか。

そんなことよりも、私はあなたの店で買い物をしてあげたのです。そして、その買ったものに対して、あなたの儲けを加えた値段でお金を払ってあげていたのです。ニコツと笑って「ありがとうございますました」と、私にはつきりと聞こえるぐらいの声の大ききさで、礼のひとつも言えないのですか。当然のような顔をして、お金をレジにぶち込むのはやめなさい。適正な値段なのでしようが、なにかぼったくられたような気分させられます。ほんど、不愉快です。

それからもうひとつ、長野県にある町の全然お客さんが入っていないかったパブスナックで働いていたおねえちゃん。あんたたちアルバイトかなんか知りませんが、なんかしゃべりなさい。接客しなさい。ムスツとした顔で、置物のようにソファーにドカンと座っているんじゃない。

なにが気に入くわないか、それともただシャイで照れくさいのか知りませんが、こっちはお客さんが少なかつたせいもあるでしょうが、あなたたちが呼んでもいないのに必要以上に何人もきたため、余計な金を払わなきゃいけないハメになっていたのです。みえみえのお店の戦略に黙ってハマってやっていたのです。そのかわりといってはなんです、そのぶん楽しませなさい。どうして私たちがあなたたちを楽しませて、水割りまで作ってやらなきゃいけないのですか。そのうえ、私たちが言うギャグをいちいち評価したりして、あなたたちはいったい何者ですか。

「今のおもしろくない」

「それ、ちよつとイケてる」

君たちは、どっかの演芸大会の審査員ですか。アルバイトなんだからプロになれとまでは言いませんが、もらってる金の報酬分ぐらい、ちゃんと奉仕なさい。私たちおじさんは、ただ若いおねえちゃんがそばにいるだけでうれしいとでも思っているのですか。精神的にも肉体的にも、百戦錬磨の私たちをつかまえて、そんな若さにあぐらをかいた態度が通用すると思っっているのですか。いいですか、おねえちゃん。自慢になるかならないかわかりませんが、自分でお金を払い、そのうえ酔ってたかもしれないませんが、仲間や君たちを笑わせようと、あのテーブルで真っ裸になった私の、あのサービス精神を少しは見習いなさい。

はっきり言わせてもらいます。私は芸人です。いろんなところで裸になってきましたが、あ那时的裸ほど自分のやっていることが情けなく、バカバカしく思えたことはないありません。ほんと、やりがいのない裸でした。ほんと、不愉快でした。

なんかもう、よく分かりません。さようなら・・・

追伸

また偶然長野に行くことがあって、偶然お店に寄ることがあって、偶然あの子の君たち全員がもしいたら、今度は君たちを楽しませたりしません。目の前に全員正座させて、コンコンと説教してやります。そして最後には、あの子と同じように、また真っ裸になってやりま

しかし、今度はテーブルの上でバカみたいに踊ったりしません。正座している君たちに一人一人の目の前で「これでもくらすえ」と私自慢のポコチンの皮を、ゆっくり剥いてやろうと思ってます。

どうです、まいったか、覚えていやがれ・・・